

旅行記

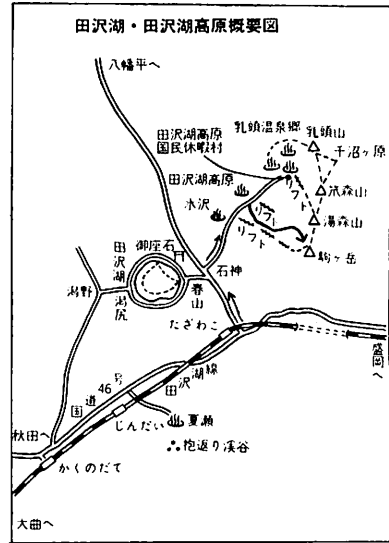
十和田 → 八甲田火山群 → 青森 → 秋田駒ガ岳

球磨農 渡辺 一 徳

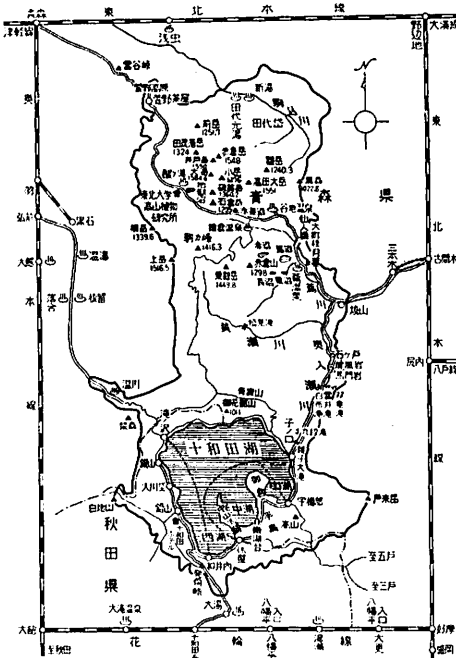
〔旅 程〕 (第1図参照)

作年10月より11月初めにかけて上記のルートで旅をする機会がありましたので御紹介致します。なお、編集委員の先生から急々の依頼で少々あわてて書きましたので不備な点が多いことをお許し下さい。

旅行の主目的は、十和田湖畔で開かれた日本火山学会1970年度秋季大会とその前後に行なわれた巡検会に参加することであったが、9月18日に38年ぶりに噴火した秋田駒ガ岳を見ることももう一つの目的であった。秋田駒ガ岳については、その後多くの情報が皆さんのお手もとについていると思うので、おぎないながら読んで載れば幸である。なお詳しいことは後述の文献を御参照下さい。



(第2図)



(第1図) 十和田・八甲田概要図(宮城・大曲)

10月29日(夜)玉名発→30日(夕)東京着、同、上野発→31日(朝)好摩駅乗りかえ→同(8時15分)十和田南着→同、(10時過ぎ)十和田湖着、十和田湖見学(巡検A)、午後講演会。11月1日(9時~18時)講演会、総会、シンポジウム、(夜)懇親会、秋田駒ガ岳小集会。2日(9時~18時)講演。3日(9時~18時)十和田→八甲田火山群→青森(巡検B)→盛岡(22時)。4日、盛岡→秋田駒ガ岳→盛岡。同(夜)盛岡発→5日(朝)上野着→同(夜)盛岡発→5日(朝)上野着→同(夜)玉名着。

上記のように非常に強行軍であり帰着後かなり疲れを感じた。

〔10月31日〕

十和田南駅に着いたのは8時15分頃であ

第1表 十和田火山地域の層序表

第 四 紀 世	洪 積	第3期噴出物	御倉山安山岩
		第2期噴出物	降下浮石堆石物
			安山岩質玄武岩
		第1期噴出物	浮石流堆積物
			安山岩質玄武岩
		先八甲田カルデラ浮石流(溶結凝灰岩)	
子ノ口れき岩			
新 第三 紀	中 新 世	十和田銀山層	
		生出層	

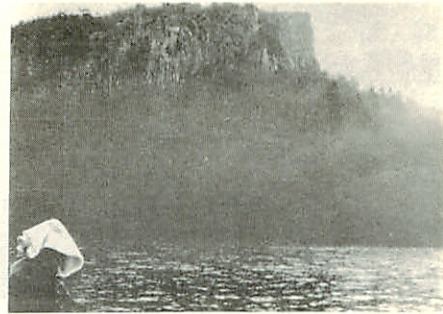


写真2

った。冷たい雨の降る中をバス停へ走る。昨年浅間で会った人達と顔を合わせ、お互いに挨拶を交わす。十和田湖へ入る発荷峠が雪の為通れないとか通れるのかという話しであったが我々の乗り込んだ乗合バスは発車した。峠は数センチの積雪であったがたいしたことはない。峠で一時下車(この間バスは待つ)、十和田湖が一望できる展望所であるが、ガスの為写真が撮れない。車は急なカルデラ壁をジグザグに下り湖岸に出る。湖に沿ってほどなく、中山半島のつけ根、休屋に到着、会場である博物館ホテルで受け付けを終え、カメラと巡検案内書を手に貸切船に乗り込む。湖上よりの見学が始まる。船は先ず休屋を出て、西側の細長い中山半島に沿って進む。弘前大の先生方の案内によれば、この半島は十

和田火山第2期の噴出物で安山岩質玄武岩とのものである。(第1表参照)溶岩の部分には見事な柱状節理が見える(写真1)。赤色で凝灰角れき岩様の部分も見えるが船からではよくわからない。以然として小雨止まず、写真撮影が難しい。やがて船は2つの半島にかこまれた中ノ湖に入る。この中ノ湖は第2期の噴出の後で陥没したか、または爆裂火口の跡らしい。後日見学する噴湖台を見上げる。湖面から200mを越える絶壁であり、これも全部第2期のもとのことである。東側の半島である御倉半島に近づく。ここは十和田火山の第3期の安山岩とのものでドームの様に見える(写真2)。船は休屋に引き返す。約1時間であったが非常に美しく雨が降らねば良い写真が撮れるのに悔まれた。



写真1

〔10月31日(午後)→11月2日〕

この間の講演会は博物館ホテルで行われた。この博物館は昭和28年に開かれたもので、十和田湖の成因、地形、地質、動植物、その他の資料が展示されており、民間のものとしては大変立派なものである。特に1969年8月に亡くなられた久野久先生の書かれた地質図や解説図などが印象に残った。

2日半で50余りの講演が行われ、活発な討論がなされた。内容については、地震に関するもの、年代測定に関するもの、マグマの成因に関するもの、岩石化学に関するもの、



写真 3



写真 4

など、物理、化学の知識を必要とするものが多く、自分の勉強不足を強く感じた。

1日の夜、懇親会の後で開かれた「秋田駒ガ岳に関する集会」は8ミリ映画の上映や討論など非常に活発で2日午前1時まで続く程であった。

〔11月3日〕

前日まで積雪のため道路が心配されていたが無事に開通し、絶好の巡検日和りに恵まれて、午前9時休屋を大型バス1台で出発した。最初の見学地、^噴湖台に到着。ここから十和田カルデラが2重の構造をしていることがよくわかる。中山半島(写真3)、御倉半島(写真4)に挟まれた中ノ湖が真下に見える。この絶壁の大部分は第2期の安山岩質玄武岩で、上部20~30mは同期の降下火砕堆積物だそ

うだ(写真5)。ここでは降下物の下部は高温のために溶結しており、いわゆる溶結降下火砕岩となっている(写真6)。

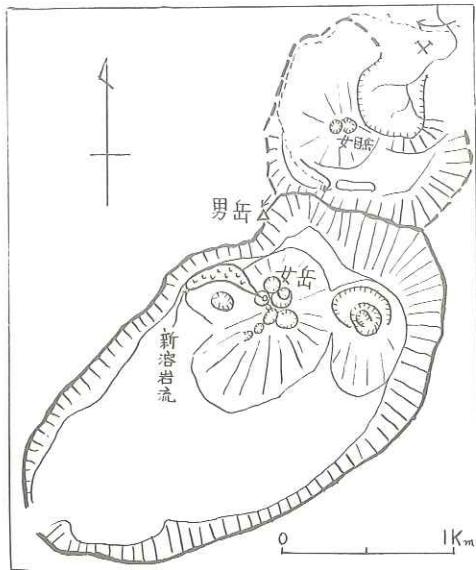
車は湖を回って北側のカルデラ壁を登り御花部山展望所へ向う。途中カルデラ壁の十和田火山第1期の噴出物を見る。凝灰角れき岩や溶岩やそれらの間に狭まる湖成層らしいものが見える。露頭の前で十和田カルデラ生成史について活発な論議がなされた。展望所からの十和田湖はすばらしかったが逆光線のため良い写真が撮れなかった。子の口で中食。有名な奥入瀬溪流に沿って焼山まで下る。十和田湖から流出している河川はこの奥入瀬川が唯一のものである。この谷の両側は十和田火山より古い「先八甲田カルデラ浮石流」と呼ばれる溶結凝灰岩であり、菊池溪谷を思わ



写真 5



写真 6



(第3図) 秋田駒ガ岳の地形図
(曾屋・正井より簡略化)

せるながめである。車は焼山より北八甲田火山群に入る。水蓮沼からのながめはすばらしく雪をかぶった高田大岳(1,551m)大岳(1,584.6m)などが美しい姿を見せた(写真7)。地獄沼や酸カ湯などの強酸性の温泉を見て青森市へ向かう。青森着は17時すぎであった。学会としての行事はここまでで終り解散。市内で夕食をすませ、明日のために三脚を購入して汽車に乗り込む。盛岡着22時、盛岡泊。

〔11月4日〕 (第2・3図参照)

今日は秋田駒ガ岳登山の日。心配された天気のかずれもなく、前夜より宿に集合していた我々のパーティー十数名は朝食ぬきで盛岡駅へ。駅で玉子そばをすすり、弁当を買い込む(私は万一の用心に2食分とウイスキーを買う)。リュックには食料、カメラ、レンズ、三脚、小型カセットレコーダー、セーター、雨具、を詰めた。田沢湖駅にて下車、駒ガ岳全体が見え、時おり山頂付近に白い噴煙が見

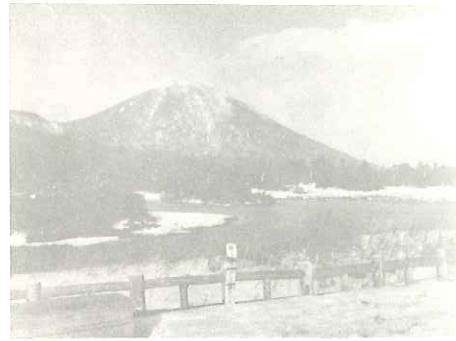


写真7



写真8

える。タクシー3台に分乗して出発。途中で雪のためタクシーを押すことシバシバであったが8合目(車道の終点)まで登れた。天気は快晴である。かなりの積雪のため足場が悪い。雷のような爆発音を聞きながら歩くこと、約1時間、男岳から東に伸びる尾根に出ると正面に9月18日からずっと噴火を続けている女岳が姿を見せる(写真8)。まわりの雪に対して雪がなく黒いのは、火山弾の落下の為である。ずっと女岳を見下しながら男岳の頂上に向かう。この間も十数分おきに爆発が起こりそのたびに立ち止まって見学する。男岳の頂上に着いたのは11時頃であった。

男岳は1,632m、女岳は約1,500mで両者の距離は約500mだから、丁度斜めに見下ろすことが出来るので絶好の見物席である。



写真
9

女岳は第3図に示す様に長径3 km、短径1.5 kmのカルデラの北部にある中央火口丘の1つであり、カルデラ底からの比高は約200 mである。

早速、カメラ、150ミリ望遠レンズ、三脚を出して噴火口に向けてセットする。カセットレコーダーのスイッチを入れて爆発音の録音をする。雪の中で十数分カメラの前に立っているのは非常に寒く、指先が痛い。1回の爆発は数十秒間から数分であるが、強い時には火山弾を200～300 mも吹き上げる(写真9)。火山弾の落下範囲は一時は火口から半径400 mに及んだそうである。爆発は火道中のマグマ柱の頭が冷えて膜がはったようになりガスが貯えられて、やがて吹き破るのである。この噴火はストロンボリ式噴火として、玄武岩質の粘性の低い溶岩に代表的なものとしてされているが、今回の噴火による新溶岩の化学分析によればSiO₂が58～59%とのことである。溶岩流は図のようにカルデラ内に流出しているが雪が積んでいない。溶岩流のふちに雪がついているが、その部分は、すっかり冷えてしまったのであろう(写真10)。この日後で採集に行った人達が溶岩流の上に登ったら、まだ暖かかったそうである。

午後1時ころから急に雪になり、写真撮影も難しくなったので下山準備。火山弾、溶岩の採集に行き登りと別のルートを下山する組



写真10 上反逆

と採集をあきらめて引き返す組に分かれた。私は少々不安になり引き返すことにした。夕方には麓のこま草荘にたどり着き、採集組もやや遅れて無事に着いた。それぞれに再会を約して帰路につく。私は地質調査所の山田直利、小野晃司の両氏と共に盛岡へ引き返し夜行列車にて東京へ。さらに5日のうちに玉名に着くことができた。

最後に旅行中、切符、旅館の手配など大変お世話になった地質調査所の小野晃司氏と、命がけで採集された駒ガ岳の火山弾の貴重なサンプルを譲って下さった東大の大島治氏に心から感謝の意を表してペンを置く。

文 献

- 曾屋龍典・正井義郎(1971)秋田駒ガ岳の噴火 地質ニュース、197号 6～13頁
 宮城一男・大池昭二(1970)地質研究：十和田・八甲田火山 日本火山学会 1970年度秋季大会地質見学案内書

